

滋賀県立大学人間看護学部 地域交流看護実践研究センター

活動報告書

2023 年度

## ごあいさつ

2023年度は、新型コロナウイルス感染症が令和5年5月より5類感染症移行に伴い、個人の選択を尊重し、感染対策の実施については個人・事業者の判断が基本となり、日常生活行動が拡大されてきた年度でもありました。本年度、本センターの事業は、講演会や学習会をすべて対面形式で行うことができ、多くの方が参加され活気が戻ってきました。もちろん、希望と状況によりリモートでの開催も同時に取り入れて行いました。

本センターで開催された専門講座は、人数制限をしたディスカッションが形式のものが多く企画され対面でのメリットを活かせる内容でした。さらに、教員個人の教育や研究の内容だけでなく、人間看護学部のFD委員会開催のものや人間看護学研究科修士が企画したものなど多岐に及び専門講座の活性化がなされました。

本年度の特有の事業として本センターは、新型コロナウイルス感染症による行動規制が緩和され活動を再開していく中で、次年度には本センター開設20年を迎えることになりました。新たな活動を開始していくために、本年度は本学の教育研究高度化促進費の助成を受け地域交流看護実践研究センターの活動の評価を行いました。また、県内でご協力ご支援いただいている実習指導者の方との人材育成の交流を深めていくために、シミュレーション教育の充実に向けての教育環境整備にも力を注いできました。

本センターの活動を通して、県内の看護職をはじめ地域の医療福祉・教育関係者の方々と交流を増し、地域住民の健康の維持・増進のため看護の教育・研究の質向上に努めていきたいと思っております。さまざまな社会状況の中でも地域の皆様方の健康に貢献できるよう地域の看護職の皆様と共に考え、連携した活動を今後も進めてまいりたいと思っております。皆様の一層のご支援とご高配をお願いいたします。

滋賀県立大学人間看護学部  
地域交流看護実践研究センター長  
横井 和美

## 目次

ごあいさつ

I. 2023 年度(令和 5 年度)の活動	…	P1
II. 各部門の活動報告		
一 研究部門	…	P2
一 研修部門	…	P4
一 情報部門	…	P10
III. 地域活動に向けての試み	…	P11

## II. 2023年度(令和5年度)の活動

	研究部門	研修部門	情報部門	
4月	・研究相談、文献検索	・公開講義開催	・ホームページ更新	・運営協議会委員委嘱
5月	・共同研究新規募集 ・共同研究審査会(継続) ・看護協会共同事業受入 ・研究相談	・公開講義開催	・ホームページ更新 ・事業案内を関係機関に発送	
6月	・研究相談、文献検索 ・看護研究学習会開催	・専門講座開催 ・公開講義開催	・ホームページ更新	・運営協議会開催
7月	・研究相談、文献検索 ・看護研究学習会開催	・専門講座開催	・ホームページ更新	
8月	・看護研究学習会開催 ・研究相談、文献検索		・ホームページ更新	・看護協会査読受入
9月	・研究相談	・専門講座開催	・ホームページ更新	
10月	・研究相談 ・共同研究募集(新規追加)	・講演会開催 ・専門講座開催	・ホームページ更新	・看護協会査読受入
11月	・研究相談、文献検索	・公開講義開催 ・専門講座開催	・ホームページ更新	
12月	・共同研究審査会(新規追加) ・研究相談	・公開講義開催 ・専門講座開催	・ホームページ更新	
1月	・共同研究審査会(新規追加) ・研究相談	・専門講座開催	・ホームページ更新 ・アクセシビリティ対応作業	
2月	・研究相談、文献検索 ・看護協会共同事業完了報告		・2024年度版リーフレット作成 ・2023年度活動報告書作成	
3月	・研究相談、文献検索	・専門講座開催	・ホームページ更新	・画像配信システム設置

### Ⅲ. 各部門の活動報告

#### A. 研究部門

1. 委員：本田可奈子教授、米田照美准教授、片山将宏講師、岡崎瑞生講師

#### 2. 活動の概要

##### 1) 共同研究（6件：継続4件、新規2件）

昨年度から継続の共同研究4件の研究費助成について、共同研究審査会での審査を経て承認した。また、新規の共同研究2件の採択について、共同研究審査会の審査を経て承認を行った。

##### 2) 研究相談（20件：対面13件、オンライン5件、メール1件、電話1件）、文献検索（8件）

研究相談の総数は20件であった。そのうち、対面での研究相談が13件、オンライン5件、メール1件、電話1件であった。県外からの研究相談の申込みが複数あったことをふまえ、研究相談を利用できる対象者の条件について、あらためて整理した。

文献検索の利用件数は8件であった。

##### 3) 看護研究学習会（6/28、7/19、7/26、8/3）各11名

滋賀県看護協会より委託を受け、看護研究学習会（2023年度看護研究サポートリーダー育成研修）を開催した。本年度は6施設8名の方が受講された。研修の開催方法については、新型コロナウイルス感染症が5類に移行されたことから対面での開催となった。

研修では、看護研究方法の理解を深め、臨床看護研究のサポートリーダーとしての能力を養うことを目指し、文献検索の方法や論文のクリティーク、研究デザインの立案、論文発表や論文投稿に備えた査読、学会発表、看護研究サポートリーダーの役割等についての講義・グループワークを実施した。

研修受講後のアンケート結果では、個人ワークやグループワーク等を通して、参加者全員が看護研究サポートにおける自己の役割を見出すことができたと回答していた。

#### 4. 次年度にむけて

今後も必要時、社会情勢をふまえたテーマで共同研究を募集し、大学と地域の連携を進め、地域の課題解決を支援していく必要があると考える。共同研究で得られた研究データの取り扱いについては規定を設けていく予定である。

また、研究相談については、新型コロナウイルス感染症が5類に移行されてはいるが対面形式だけでなく、オンライン・メールでの研究相談も継続していくことが相談者のニーズに合っていると推察される。引き続き、研究相談利用者の希望に沿えるよう環境を整えていく。

看護研究学習会は、全日程を対面形式で実施した。受講生の中には修士号をもつ看護職や専門看護師や認定看護師のような高度看護実践看護師も参加されており、受講生の多様化がみられた。臨床現場では、学士をもつ看護職の割合や専門看護師や認定看護師のような研究能力の有する高度看護実践看護師が増加しており、研究指導体制も充実しつつあることが伺える。本学習会も年々、受講生の参加人数が減少してきており、今後は現場のニーズを把握したうえで新たな学習会の内容や形態、参加対象者について検討していく必要があると考える。

## B. 研修部門

1. 委員：古川洋子准教授、國丸周平講師、松原千晴講師

## 2. 活動の概要

1) 講演会 私たちができること -ヤングケアラーの声からわかること-  
(2022/10/21 38名)

大阪大学大学院 人間科学研究科の村上靖彦教授を講師に招き、講演会を開催した。村上講師が地域で関わってきたヤングケアラーと呼ばれる子どもたちの思いや生活の現状が複数の事例に渡って紹介され、社会の中で顕在化していなくても、確かに存在しているヤングケアラーの実際と、それに対して行われている支援について学びを深めた。

ヤングケアラーをネガティブなラベルで捉えることが本当に適切か、支援が必要なのはヤングケアラー本人だけで良いのかを考える機会となった。参加者からは「ヤングケアラーに対するイメージを明確に持つことができた」、「普段見えない部分を知ることができて良かった」、「想像していたよりも事態が深刻であることに気づいた」等、新しい知見を得た旨の感想が多く述べられた研修会であった。

## 2) 専門講座

9件 17講座

① 周産期包括的支援と助産師ケア -多職種連携と助産師活動-

(2023/6/26：9名、6/27：7名、7/10：AM 12名、7/10：PM 11名)

「周産期包括的支援と助産師」-多職種連携と助産師活動と題し、専門講座を行った。様々なところで、助産師業務に携わっている助産師活動から多職種との連携を考え深めることを目的とした。周産期だけでなく、思春期から産後育児期にかけて女性の健康をどのように支援していくのかについて、各専門分野の講師の方からの講義を受けた後、参加者とのセッションをおこなった。参加者も病院のみならず、地域や児童福祉施設、教育機関で活躍している助産師など様々な方の参加があった。いずれの回も盛況に終わり、知識のブラッシュアップや繋がりを紡ぐことのできた時間を持つことができた。実施後アンケートにおいても、どの回も満足度の高い結果であった。今年で2回目の開催であるが、引き続き専門講座を行っていきたい。

② 地域包括ケアの時代における高度実践看護  
(2023/9/16：9名、12/2：6名、3/16：11名)

本専門講座は県内のCNSの高度実践看護の報告を基に、病院、施設、在宅、地域保健等の様々な場で地域生活者である人々の健康を守る看護者と滋賀の看護の発展とつながりを目指すこととし、地域交流看護実践研究センターで定期的に開催することとした。

結果、本年度は県内で活躍している慢性疾患看護専門看護師の3名の方々がそれぞれ日々の活動を報告し、介入した事例の看護実践について参加者と看護の視点や方法を共有しながら意見交換がなされた。開催時期により参加者人数にバラつきはあったが、回数を重ねるごとに多くの意見が交わされ、地域での看護の課題が見出されつつあった。

今後、より多くの施設からの参加者を募っていくために参加しやすいテーマ設定を検討していく必要があると考えられた。

③ これからの助産マネジメント -助産師の自律と価値を考える-  
(2023/10/26 26名)

1 講目の宮川友美講師からは、開業への思いや開業までの道のり、そして現在の助産所経営について講演がなされた。「クラウドファンディング」への挑戦で開業資金の一部を調達されたことは本邦初で、保育や調理を専門とする母親らが助産所での託児や食事提供で活躍されていたり、将来開業したい助産師に継続ケア研修の機会を提供されたりするなど、ユニークな経営も紹介された。

2 講目の渡邊安衣子講師からは、様々な形態での助産師業務や専業主婦の時期を経て「助産師が行う性教育」において専門性を高められ、株式会社を設立した経緯の紹介がなされた。他職種の方々との交流により助産師の長所・短所を再発見し、IT技術を駆使しながら助産師が持つ知識や技術の価値を上げていった状況も紹介された。

滋賀県内の病院・診療所・助産所（出張開業含む）で就労中の助産師のみならず、子育て中で未就労の助産師や京都府で活動中の助産師の参加もあった。助産師には多様な働き方があり、新しい視点で開業や起業の選択肢も見据えて今後の可能性を追求していくことの重要性を示した興味深い講座であった。



④ 超高齢者の晩年の生を支えるケア-老いを受け入れながら自分の最期を考える-  
(2023/12/21 第1部 15名 第2部 11名)

第1部は、青梅慶友病院の紹介、および高齢者に親しみを持ち人生の先輩として敬って関わること、できることを奪わないこと、美しい寝姿は亡くなった時の姿勢につながる、日々のケアがグリーフケアになること、同じ事象も見方が変わるとスタッフ自身も変わり、その結果、患者も変わるなど実践している看護について紹介された。また、豊かな晩年を過ごすためには、高齢者にふさわしい医療を提供することが重要で、組織のトップとして人がいない時間帯がないように人材を確保する取り組みなどが紹介された。

第2部では、あやめの里での「看取りの見える化シート」の活用について紹介され、参加者の自施設での取り組みについて情報交換を行った。また、高齢者が増える中、病院内外を問わず看護職と介護職の連携は重要で、お互いに壁を作らず他職種を尊重して協働していくことが超高齢者の晩年の生を支え、意思を尊重した最期を迎えることにつながることを再認識することができた。

⑤ 特別な配慮が必要な看護学生の理解と支援  
(2024/3/1 74名)

順天堂大学 保健看護学部精神看護学領域 北川 明先生をお招きし、できないことがわかりにくい特別な配慮が必要な看護学生に対する理解とどのような配慮をすればよいのかを具体的に解りやすく講演頂いた。令和6年4月より、合理的配慮の提供が義務化され、学校や職場においては組織全体で取り組むことも求められている現状から、臨床からも参加頂き、建設的な対話をするために自らの特性(強み・弱み)を知った上でSOSを発信する方法を伝えていくこと、自分の学生時と指導の方法も大きくかわってきていることや、発達障害・パーソナリティ障害について知れたこと。臨床で教育に携わっているの、面談や問題解決に活かせるの大切さを学んだなど満足度の高い講演であった。

⑥ 母子保健・子育て支援における「対話」(ダイアログ)の可能性を共に考える  
(2024/3/8 10名)

フィンランド発祥で精神疾患患者の急性期対応として取組まれているオープンダイアログ(OD)をはじめ、未来語りのダイアログ(AD)、早期ダイアログ(ED)が日本でも注目され、対人支援領域を中心に対話志向の広がりがみられている。

本講座では、母子保健・子育て支援・児童虐待防止の分野で対話実践に取り組まれている門間晶子氏や加藤まり氏を講師に招き、ダイアログの背景や考え方、ODの原則

や基本要素、OD に特徴的なリフレクティングについて、さらに講師の実践についても講義を受けた。さらに、OD を体験するワークとして、リスニング・ワーク、リフレクティング・ワーク（聴く・話すを分ける体験）を行った。

参加者からは、「聴くことに徹するのが案外難しい」「話し手役の時、しっかり聞いてもらうことにより安心感・すっきり感・新鮮さを感じた」「リフレクティングを受け取ることで、自分が意識していなかったことに気づかされた」といった感想があり、各参加者自身が対話から様々な感覚を味わっている様子であった。

参加者は母子保健や子育て支援関係者だけではなく多分野に及んでいたが、多様な参加者により OD でいう多声性（ポリフォニー）が豊かなワークショップとなった。

#### ⑦ ナイチンゲールと音楽の力に導かれた看護と看護教育～バトンをつなぐ～

(2024/3/15 50名)

横井和美教授の最終講義を公開して、時代の変化に応じた看護教育の変遷と、開学当初から大切にしてきた発達段階と各ステージに応じた看護を段階的に学ぶことができる成人看護学領域の演習・実習について紹介された。また、専門看護師教育においては、アセスメント力、調整力、実践力を持った CNS の輩出をされ、修了後も専門講座を公開して地域包括ケア時代における高度実践看護を探求している取組が紹介された。さらに、ナイチンゲールの看護覚え書を教訓に看護の方向性を導き省察してきたこと、また、音楽の力により対象者の可能性を見出し、看護を熟考してきた過程も紹介された。

参加者自身も「自分のやりたいこと」「自分が今できること」「社会から今求められていること」を考えながらキャリアを紡いでこられた内容を聞き、教育・研究・社会貢献について考える機会となった。

#### ⑧ 小学校から高等学校におけるシームレスな性教育

(2024/3/16 31名)

小学校、中学校、高等学校に勤務する養護教諭の方々を講師に招き、各年代における性に関する課題と性教育の現状、校内での調整、地域とのつながりなどについて講義を受けた。その後、参加者とともに、各年代に応じた性教育の実現にむけた取り組みについて考えた。地域ごとの課題を明確にし、それに対応する支援を行う事の重要性を共有することができた。

また、それらを地域の小中学校で共有・連携し切れ目のない支援につなげていくことが重要であることが理解できた。性をプラスのイメージでとらえ、性に関して「命に直結するとても大切なこと」というメッセージを伝えることの重要性を再認識できた講義であった。

## ⑨ 看護におけるシミュレーション教育の基本と実際

(2024/3/18 31名)

看護基礎教育におけるシミュレーション教育は、専門職としての看護実践能力を培うための重要な教育手法の一つとして注目されている。本講座は、講師に藤野ユリ子教授（福岡女学院看護大学 シミュレーション教育センター長）を招き、「看護におけるシミュレーション教育の基本と実際」について、シミュレーション委員会の講演活動を公開した。シミュレーション教育の基本とその一連の流れ（事前学習、ブリーフィング、オリエンテーション、シミュレーション、デブリーフィング、まとめ、評価）について、実際の演習場面の動画も交えた講演であった。そして、藤野教授が取り組まれている「ミッションタウン」の開発と導入の実際についても紹介された。

参加者らは、シミュレーション教育の重要性を再認識するとともに、その具体的手法を学ぶことができた。本講座は学外への広報期間が短かったため学外の参加者を得ることができなかったが、参加者にとって今後の教育・研究活動に生かすことができる有意義な学びを得る機会となった。

## 3) 卒後教育-公開講義

5件 8講義

## ① 「ホリスティックケア論」東洋医学と看護「せんねん灸を用いたお灸体験講座」

(2023/4/27 34名)

学部3・4回生対象講義であるホリスティックケア論の中で「東洋医学と看護：せんねん灸を用いたお灸体験講座」を公開講義として開講した。講師に森澤孝次郎先生（セネファ株式会社；鍼灸師・柔道整復師）にお越し頂き、東洋医学やお灸の歴史についての講義を受けた後、実際にツボを探し、せんねん灸をすえる演習を行った。受講生からの感想としては、せんねん灸の原料である薬草「よもぎ」は、大学からも近い長浜市滋賀の薬草の山、伊吹山が発祥地であり、滋賀県とお灸の縁が深いことを知り、お灸の種類が多様（熱さのレベル、煙の出ないもの、アロマ灸など）にあり自分の好みのお灸を選択して実際に使い効果を体感することでお灸を東洋医学の未病治の観点からの心身の養生法（セルフケア）の一つとして今後も活用していきたいという意見が多くあった。

東洋医学がもたらす人々への健康への効果、看護・医療への応用の可能性を実感する機会となったと考える。次年度以降も県内の看護師の方にもより多く受講していただけるよう公開講義として実施していけるよう調整していく。

\*この授業では、毎年、セネファ株式会社代表取締役社長の押谷様のご厚意で、授業と自宅で活用できるようせんねん灸体験セットを受講生全員に無償で提供していただいた。この場を借りて心から感謝申し上げます。

## ② 「チャイルドライフケア論」

(2023/4/24 13名 5/8 8名 5/17 14名)

「子ども虐待における看護に関する基礎知識と倫理的課題」「子ども虐待事例における看護と倫理的課題」についての講義を公開した。参加者からは、虐待かもしれないという視点を常に持って子どもと関わることや子ども虐待にチームで取り組む重要性が理解できたとの意見が多かった。また、「重篤な疾患を持つ新生児と家族の看護に関する基礎知識と倫理的課題」では、NICU看護に携わる地域の看護師の方にも参加され、日々のケア・退院サポートの強化など滋賀県全体で連携して取り組む重要性が理解できたとの意見があった。

普段流れ早い臨床現場から一旦立ち止まり、事例を深く丁寧に振り返ることで倫理的な側面を議論することができ、有意義な講義だった。

## ③ 「看護管理学」人材マネジメント「キャリア支援について」

(2023/6/20 84名)

2023年6月20日(火)1・2限、近畿大学IR/教育センター竹中喜一准教授を講師に招き、人間看護学部公開講義「看護管理学：人材マネジメント～キャリア支援」を開催した。キャリア発達・開発、キャリアアンカー、人材育成で活用できる学習理論とその活用方法について分かりやすく説明され、人材育成やキャリア支援にも活用できる講義であった。講義は、Google・フォームを活用した双方性のあるアクティブラーニングを交えながらの形式でなされた。(公開講義への参加者：学部4回生72名、学外の県内看護職の方8名、学内職員4名)

## ④ 「小児看護学」小児在宅療養と救急看護

(2023/11/10 75名)

滋賀県立小児保健医療センター 小児看護専門看護師・小児救急看護認定看護師の馬場恵子氏を講師に迎え、滋賀や湖東地域の小児救急の現状や小児救急認定看護師の役割と子どものフィジカルアセスメントの視点や、在宅で生活する医療的ケア児の急変時対応などを講義頂いた。また、虐待の話も講義頂き、患児のみならず家族を対象とする看護の重要性についても学ぶ機会であり、専門的知識を解りやすく説明頂き学生にとって専門家ならではの興味深いものであった。また、参加頂いた看護師の方からは、講義修了後に講師との有意義なディスカッションも持て現場の方にも充実した内容となっていた。

## ⑤ 「小児看護学」予防接種と感染症 2023/12/22 申込なし

#### 4. 次年度にむけて

研修部門の企画および運営を振り返った。1)の講演部門においては、COVID-19が5類感染症に移行後の講演となり、医療・福祉系の職員や教員、学生などが参加され、一つの問題を様々な角度で捉え学びを深めることができ開催の前向きな評価につながった。2)の専門講座では、学内教員の協力を得ながらホットなトピックにフォーカスした多くの講座の開催に至った。3)公開講座については、例年と同様に卒後教育の一環として行った。

次年度以降も、引き続き皆様からの要望を募り、県内の看護職者のさらなる質の向上に向け講演ならびに各種講座を展開していきたい。

### C. 情報部門

1. 委員：本田可奈子教授、岡崎瑞生講師、國丸周平講師

#### 2. 活動の概要

##### 1) 広報活動とホームページ (HP) の更新

・講演会、専門講座、共同研究募集についてチラシ・ポスターを紙媒体で発送し、関係機関への周知を行った。また、地域交流看護実践研究センターのホームページ上に、共同研究募集や講演会等に関する記事を掲載し、地域の看護職者への周知を行った。

・HP内に申込フォームを作成し、web上で専門講座や公開講義、講演会の参加申し込みが行えるよう整えた。申込フォームを利用して参加を申込み出席者も多くみられた。

##### 2) 活動報告書の作成

・昨年度に引き続き、HPに掲載する活動報告書を作成した。活動報告書はHPに掲載し、これまでのセンターの活動実績を閲覧できるよう整えた。

##### 3) リーフレットの改訂

・令和6年度版のリーフレットを作成した。掲載する写真を更新し、令和5年度の活動の様子をイメージしやすいリーフレットに更新した。令和5年度卒業式で卒業生に配布する。

##### 4) 円滑なオンライン会議システム実施のための環境整備

・オンライン会議システムを円滑に行うための環境を整えた。オンライン会議システムを用いてゲストをお招きし、出席者は本学会議室に集まる1対複数人形式でオンライン会議を行う機会が増えたため、集音マイク・スピーカーを新たに購入した。

#### 4. 次年度にむけて

情報部門が発足して3年が経過した。Covid-19の流行を受けて、社会では会議や講演会のオンライン開催やwebでの申し込みシステム等の利用が一般化してきた。このような社会情勢のなかで、本センターにおいてもwebを通じて本センターの活動を多くの人に周知し、利用していただけるよう、本センターに関連したweb環境の整備・改善に努めていく。

### Ⅲ. 地域活動に向けての試み

地域交流看護実践研究センターの運営協議会の意見を反映して、実習施設の臨床講師等と連携して人材育成や研究活動をより活性化していくために、以前より行われているシミュレーション教育の教育環境整備に努めた。導入した画像収録システムが、実習施設と大学のシミュレーション室とつながり、臨床講師等と連携したシミュレーション教育の発展に寄与できればと願いたい。臨床講師等と連携した人材育成は、地域住民の健康の維持・増進のため看護の教育・研究につながり、本センターの地域活動を活性化していくものとする。

#### 画像収録システムの写真



シミュレーション室の複数のカメラからの映像を収録する



選択した映像をリアルタイムにリモートで配信する。

